

保田歴史散歩マップ

文人たちが愛し、芸術が生まれた町

① 菱川師宣誕生地 (ひしかわもろのぶたんじょうち)



江戸初期の寛永頃、師宣は保田に生まれた。父の家業は縫箔師。師宣の芸術的下地は幼い頃につちかわれ、浮世絵師として大成。

② 別願院 (べつがんにん)



菱川家の菩提寺で師宣の墓(再建)がある。元禄7年(1694)6月4日、江戸で亡くなった。

③ 房州海水浴発祥地の碑



保田海岸に建つ石碑。夏目漱石や西条八十も海水浴を楽しんだ海岸。富士山の絶景ポイント。

④ 保田神社 (ほたじんしゃ)



祭神はヤマトタケルノミコト。保田の鎮守で、秋の保田地区祭礼では屋台、神輿が集結する。日清・日露戦争記念碑もある。

⑤ 観音寺 (かんのんじ)



戦国大名里見氏ゆかりの寺。里見義堯の陣所にもなった。境内には相撲取り雲ノ戸重右衛門の墓、関東大震災記念碑がある。

⑥ 大行寺 (だいぎょうじ)



小林一茶が訪れた寺。直筆の句短冊が伝存する。欄間彫刻は武志伊八の作。

⑦ 存林寺 (ぞんりんじ)



武田石翁の墓がある。妻の墓石として自ら刻んだもの。本堂須弥壇彫刻は武志伊八作の「波とウサギ」「波と宝珠」。

⑧ 汐止橋 (しおどめばし)



元名川にかかる明治28年の石積アーチ橋。形的美しさと高い石積技術から土木遺産に認定。

⑨ 妙本寺 (みょうほんじ)



日蓮宗の古刹で里見氏の庇護を受けた。寺宝類は10月の虫干しで公開される。後藤義光の客殿向拝彫刻は必見。

⑩ 菱川師宣記念館 (ひしかわもろのぶきねんかん)



師宣の業績と浮世絵の歴史を紹介する浮世絵美術館。

TEL 0470-55-4061



浮世絵の創始者 菱川師宣の故郷



菱川師宣は、安房国保田（千葉県鋸南町）で縫箔刺繍業を営む父菱川吉左衛門と母オタマとの間に、七人兄弟の第4子長男として誕生。名は吉兵衛、晩年には友竹と号しました。生年は不祥ですが、寛永の中頃(1630年頃)と推定されています。幼い頃より絵を描くのが好きだった師宣は、家業を手伝うかわら、漢画や狩野派、土佐派などの様々な画に接し、独学で画技を磨きました。

その後江戸に出た師宣は、版本の版下絵師として活躍、文章を少なく、挿絵を大きく取り入れた絵本形式で、江戸の庶民の人気を獲得しました。さらに鑑賞用としての木版摺りの一枚絵を創始、それまで高価で一部の士階級のものでしかなかった絵画文化の大衆化に貢献しました。

師宣は常に江戸の庶民に目を向け、掛軸や絵巻物などの肉筆画においても、歌舞伎や吉原遊郭などの様子をこまやかに、色鮮やかに描き、「見返り美人図」に見られるような独自の女性美を追求、「浮世」と呼ばれた当時の世相にマッチした新しい絵画「浮世絵」を確立しました。

また師宣は故郷房州保田をこよなく愛し、誇りとしていた絵師で、落款（署名）に「房陽」「房國」と書き入れたり、保田の別願院に親族の供養、感謝のための梵鐘を寄進したりしています。

日本が世界に誇れる絵画文化「浮世絵」。その始まりは、菱川師宣という一人の絵師の活躍から始まるのです。



夏目漱石・正岡子規の青春

保田は明治以降、多くの避暑客でにぎわう避暑地として人気がありました。多くの文人も訪れ、作品の中の舞台として登場させています。

夏目漱石は、明治22年(1889)8月、22歳の時、第一高等中学の学友4人と房州を訪れています。汽船で保田に着いた一行は、昼は海水浴や鋸山散策。夜は酒盛りに囲碁、カルタと学生時代の夏休みを大いに楽しんだようです。旅から帰ると、漱石はこの旅の紀行漢詩文集「木屑録(ぼくせつろく)」を書き上げました。これによると、日焼けでひどい真っ黒になっていく自分を鏡で見て驚く漱石が書かれています。

小説「こころ」には保田が舞台となる場面もあります。この漱石の海水浴を記念し、保田海岸には房州海水浴発祥地の石碑が建てられました。

漱石は「木屑録」を、大親友の正岡子規に見せました。触発された子規は、その2年後の明治24年、房総の一人旅へ出ました。千葉から大多喜、鴨川と外房を歩き、保田、鋸山を訪れ、汽船で東京へ戻りました。新しい俳諧を模索していた子規は、この旅で、多くの俳句を残し、紀行文「かくれ蓑」「かくれみの句集」も書きあげて、漱石に見せています。

後に文学界の巨匠となる二人が文学的資質に目覚めたのがこの房総旅行、特に鋸山の衝撃的な印象だったと言われています。



安房の名工 武田石翁

江戸時代後期、安房には三名工と呼ばれた3人の彫刻師がいました。北朝夷村(南房総市千倉)出身で、社寺彫刻に優れた技を見せ、特に龍に優れた「後藤彫り」の後藤利兵衛橘義光(初代)。下打墨村(鴨川市)出身で、厚彫りの独特の風格と雄大な波で「波の伊八」とあだ名された武志伊八郎信由(初代)。そして元名村(鋸南町)を拠点とした石彫りの達人、武田石翁です。彼らの作品は鋸南町の寺社でも見ることができます。

武田石翁は、安永8年(1779)本織村(南房総市本織)に生まれました。幼い頃より手先が器用で、元名村の石工、小滝勘蔵に弟子入りし、後に小滝家の婿養子となりました。40歳頃より石翁と名乗り、芸術的な彫刻作品に没頭。名人気質で自尊心が人一倍強かった石翁は、安房を中心に石仏、狛犬、宝塔、獅子置物、根付など多くの作品を残しました。特に黒蠟石の精密な彫刻を手がけ、獅子が得意でした。墓は存林寺にあります。



西条八十と童謡「かなりや」

詩人、西条八十も保田を愛した一人です。早稲田中学時代から保田にたびたび避暑に訪れていた八十は、保田海岸でその幻想的な詩風を培いました。今なお歌い継がれている童謡「かなりや」は、保田で創作されたもので、大正7年(1918)に児童雑誌「赤い鳥」に発表され、26歳の新人無名の八十が世に出るきっかけとなった名作です。



保田でお幸(こう)ちゃんという一人の少女と出会い、いっしょに海水浴をし、二人は晩年まで交流が続ききました。唄を忘れた「かなりや」は彼女がモデルとも言われ、八十の淡い思い出があった保田海岸です。

鋸南の水仙

鋸南町の水仙は、古くから鋸山南麓に多く自生し、江戸時代中頃から江戸に出荷され、江戸の町の正月を飾る花としてもてはやされたそうです。明治期には特産として浮世絵にもなりました。現在は江月地区の水仙ロードや大崩地区の野山一面に咲き誇る水仙を見に、多くの観光客が早春の鋸南町を訪れます。

鋸山日本寺の通天窟の右手、格子のはまった石祠の中に水仙を手にした珍しい羅漢像があります。台座には「東京下谷下車坂町華太」とあり、大正5年(1916)東京の生花問屋「華太」の主人、内田太郎吉に世話になった人たちにより、太郎吉に似せて造られ日本寺に奉納された羅漢像です。明治頃、たまたま保田に遊びに来た太郎吉は、このあたりにすばらしい水仙が多いことを見つけ、地元で栽培法を教え、東京都下への販売路を斡旋したのです。現在の鋸南町の特産となった水仙の普及の基礎を作った恩人です。

